いわゆる複合動詞後項の意義論的考察

――源氏物語を資料として――

東辻保和

目次

はじめに
一、後置率
二、後項動詞と意義範疇との関係
三、前項動詞と後項動詞との意義関係
四、補助動詞との関係
むすび

はじめに

ここで複合動詞とは、動詞連用形に他の動詞が複合してできたものをいう。知られるように、平安時代には複合動詞が存在しなかったとする説も有るが、それについては、いま触れない。小稿では、『源氏物語大成索引篇』に複合動詞として挙げられているものを考察の対象とする。

複合動詞の前項と後項との意味関係については、既に先学による高論が有り[1]、また、後項なかんずく補助動詞的要素の意味についても、すぐれた研究がなされている[2]。

ところで、源氏物語の複合動詞がどのような動詞によって構成されているかを、とくに後項の動詞（以下「後項動詞」と称する。）について調べてみたところ、後項として使用される度数が、動詞によって著しく異なることがわかった。いま、使用度数の多いものから十位まで並べてみると、次のとおりである。（　）は使用度数を表す。なお、度数の数え方については、注4を参照されたい。

出づ(109)、果つ(97)、置く(73)、合ふ(68)、居る(61)、渡る(57)、なす(55)、初む(54)、ゆく(50)、ありく(48)

これらの語が、源氏物語全体ではどのくらい使われているのか、寿岳章子氏の『源氏物語基礎語彙表』[3]（以下「基礎語彙表」と略称する。）に引き当てゝみると、次のとおりである。＜　＞は、動詞内の順位を示す。

出づ＜21＞、置く＜44＞、居る＜46＞、渡る＜22＞、なす＜84＞、行く＜70＞

これ以外の語は、「基礎語彙表」には出てこない。一方、「基礎語彙表」の動詞を使用率によって一位から十位まで拾ってみると、次のようになる。

あり、す、思ふ、見る、おぼす、きこゆ、いふ、はべり、のたまふ、なる

このようにして、後項としての使用度は、源氏物語全体での使用率と全く一致しないことが明らかになるのである。この事実から、複合動詞後項には、それ独自の秩序が存在するのではないか、と考えるに至った。

一、後置率

動詞が複合動詞を構成する場合、前項となるか後項となるかのいずれかであることは、改めて言うまでもない。動詞には、高率で後項に用いられる語とそうでない語との有ることが予測せられる。そこで、次のようにして、各動詞の後置率を求める。[4]

$$\frac{\text{後項としての異なり複合度数}}{\text{前項としての異なり複合度数}+\text{後項としての異なり複合度数}}\times 100=\text{後置率}$$

別表のとおりである。なお、後置率100パーセントの語については、諸索引類[5]を検したうえ、源氏物語以外においても前項に用いられた例の見当らないものに○印を付けた。

後置率100パーセントの語の中、「初む」「敢ふ」「止す」「かぬ」「そす」「交ふ」「しろふ」「果す」「含む」などは、従来から国語辞書において、接尾辞（語）とされているものであって、それらが専ら複合語内部で後置される点に注意されてきている。これに対して、従来、接尾辞とも、あるいは補助動詞ともされていない語でも、後置率100パーセントの語が多い。

次に、後置率を見て、とくに気付いた二点を挙げる。第一に、『基礎語彙表』では動詞の第一位を占めている「あり」が、後置率では一六・七パーセント（前項例5）であることである。後項例は「残り有り」一例である。思うに、これは、存在詞「あり」が動詞に下接した場合、上接音節と合していわゆる完了の助動詞「り」と化した結果であって、とくに存在の意を強調する場合以外は、「あり」が後項となって複合動詞を構成することは無かったのであろう。

第二に、「思ふ(12.9＝後置率)」「思す(9.3)」「思ほす(9.1)」「思しめす(16.7)」「言ふ(12.7)」「語る(10)」「問ふ(10)」「宣ふ(16.9)」「見る(12.9)」「見ゆ(6.7)」「聞く(16.4)」「聞ゆ(1.3)」「読む(7.7)」「書く(20.8)」など、人間の基本的認識や行為と深い関係を有する動詞の後置率が、悉く極めて低いことである。かかる現象が何に起因するかについては、俄かに明らかにしがたいのであるが、後置率と動詞の意義との間に、何らかの関係が存在するのではないか、と思われるのである。

二、後項動詞と意義範疇との関係

後項動詞を意義分類して考察したところを述べたい。意義分類に当っては、国立国語研究所編『分類語彙表』（第二版）を基準とした。別表のとおりである。[6] これを数量化して纏めれば〈表1〉のようになる。[7] 意義範疇を「2.1抽象的関係」「2.3精神および行為」「2.5自然現象」に三分したのも、『分類語彙表』に従ったものである。

ここで、意義範疇別に数値を詳しく検討してみよう。後置率五〇パーセント台を境として、六〇パーセント以上と四九パーセント以下とで、動詞の出現率に差が無いと仮説を立て、^{2}X検定を試みることとする。その結果は〈表2〉に記したごとく、各範疇ともに有意である。即ち、出現率に差が無いとは言えない。かくて、後置率六〇パーセント以上の動詞が四九パーセント以下の動詞よりも多いと認められる。

ただ、後置率一〇〇パーセントの動詞には、源氏物語では、後項としての用例が一例のみというものが多く、これをそのまま認めるには、危険が無くはない。そこで、第一節に述べたごとく、源氏物語以外の作品にも後項の例しか見出せない数値（＝修正値）によって、同様の検定を試みると、その結果は、〈表2〉に記したごと

く、意義範疇によって変動が生ずる。即ち、「精神および行為」と「自然現象」とでは、後置率六〇パーセント以上と四九パーセント以下とで、動詞の出現率に差が有るとは言えないこととなる。これに対して「抽象的関係」では、依然として有意差が認められる。ここに「抽象的関係」の特徴を窺い知るわけである。

ついで、意義範疇相互の比較検討を試みようと思う。たゞし、「自然現象」は絶対数が少いので比較の対象から外し、「抽象的関係」と「精神および行為」との間で、後置率六〇パーセント以上の動詞の出現率に差が無いと仮説を立て、X^2検定を試みると、〈表3〉に記したごとく、有意であって差が無いとは言えないことがわかる。即ち、「抽象的関係」の方が「精神および行為」よりも後項動詞の出現率が高いと見てよい。

以上の考察から、「抽象的関係」の動詞が他の意義範疇の動詞に比べて、最も出現度が高いと見てよかろう。

更に「抽象的関係」の内部を詳しく見ることとしたい。〈表4〉を参照されたい。

一見して「2.15」の多いことは明らかであって、「抽象的関係」全体の約七二パーセントを占める。即ち、「改新・変換」「動き」「移動・発着など」「出入り」等の意義範疇が量的に最も優勢であることがわかる。これほどの大きい語詞群落は、「精神および行為」や「自然現象」には見られない。因みに「精神および行為」の内部を詳しく見ると次表のとおりである。〈表5〉を参照されたい。

「2.30」（「感覚・疲労・睡眠」「努力・忍耐」など）が大群落をなしているが、「精神および行為」全体の約四八・五パーセントであって、「2.15」の七二パーセントには遠く及ばない。なお、「自然現象」内部については、とくに述べるべきことが無いので省略する。

三、前項動詞と後項動詞との意義関係

意義範疇を基準として見た場合の、前項動詞と後項動詞との組合せは、理論上にも実際にも、次の九通りが存在する。

「抽象的関係」―「抽象的関係」（まさりゆく・かはしそむ・おきそふ……）

「抽象的関係」―「精神および行為」（やりなす・おきまどはす・あはせいとなむ……）

「抽象的関係」―「自然現象」（入れしむ・ゐしづまる・すぎにほふ……）

「精神および行為」―「抽象的関係」（たすけはつ・馴らしそむ・すさびちらす……）

「精神および行為」―「精神および行為」（すさびくらす・あがめかしづく・なれつかうまつる……）

「精神および行為」―「自然現象」（なげきしをる・しのびやつす・のごひたゞらす……）

「自然現象」―「抽象的関係」（にほひあふ・ぬれそふ・やせおとろふ……）

「自然現象」―「精神および行為」（ひびきののしる・なりさわぐ・やつれしのぶ……）

「自然現象」―「自然現象」（とどろきひびく・あをみやす・やせあをむ……）

それぞれの組合せに、どれほどの例数が有るものなのか、調べて

みた結果は、〈表6〉のとおりである。資料には、源氏物語所用の後項動詞が前項となって構成されている複合動詞のすべてを用いた。

この表は、たとえば前項・後項共に「抽象的関係」の動詞の用いられた組合せ例は、五六七組有ることを表している。表から一見して、前項「精神および行為」、後項「抽象的関係」という組合せが最も多数であることがわかる。

いま、結合する前項・後項相互の意義範疇別結合率に差が無いという仮説を立てゝ、X^2検定してみると結果は次のとおりである。

$X^2=134.8$　自由度4　（$X^2_{0.01}=13.277$　自由度4）

ゆえに有意である。即ち、結合率に差が無いとは言えない。

かくて、前項動詞と後項動詞との結合においては、「精神および行為」と「抽象的関係」との組合せが最も多く、ついで「精神および行為」と「精神および行為」、「抽象的関係」と「抽象的関係」、「抽象的関係」と「精神および行為」の順に少くなっていると認められる。とくに、後項には「抽象的関係」の動詞の来ることが多く、全体の約六二・七パーセントを占めていることを知る。

この事実は、同時に、前節に述べたところの、複合動詞後項には「抽象的関係」の動詞の用いられることが最も多い、ということを更に確認するものと考えられる。

四、補助動詞との関係

補助動詞の性格については、「動詞のうち、本来の、独立して用いられるときの意味を変じ、他の語の下について、補助的に用いられるもの」[9]と規定されるのが一般的であろう。

後項動詞と補助動詞との関係については、後項動詞の原義あるいは実質的意味の稀薄になっているものを、補助動詞と認めようとする立場が有る。しかしながら、鈴木丹士郎氏も指摘されるように、「実質的意味の稀薄の度合にも語によって差異が見られる。」[10]ことであり、また、後項動詞は、すべてその語本来の意味に何ほどかの変容を来していると考えることも可能であろう。複合とはそういうものなのであろう。とすれば、意味の変容の度合によって、補助動詞に入れるか入れないかを定めることは、極めて困難なことであろう。

わたくしは、後項動詞と補助動詞とは連続するものと考えたい。補助動詞たる条件としては、はじめに引いたごとく、㈠実質的意味が変容を来していること。㈡他の語の下につくこと。㈢補助的に用いられること。の三つが挙げられる。

まず㈠の、実質的意味の変容ということは、勿論一語一語の意味に関わる問題であるが、右に述べたごとく、その判定の容易でない場合が少くない。従って、ここでは、より普遍的に、意義範疇との関係を調べてみようと思う。

ところで、武部良明氏[11]は、複合動詞後項のうち、補助動詞的要素一七五語（二一〇種）を凡時論的に整理され、三類二五種に分類された。そこに掲げられた動詞の一々について、『分類語彙表』の意義範疇に照し合せてみた結果、次の二二語を除いて、他の一五三語はすべて「抽象的関係」の語ばかりであることがわかった。

〈除く語〉　なす、まどふ、まよふ、しらがふ、しろふ、歩く、取る、すかす、すく、敢ふ、果す（おは）、遂げる、惜しむ、誤つ、誤る、そそくる、そびれる、はぐれる、忘れる、得る、こ

くる、たくる。

〈「抽象的関係」の語〉　あがる、あげる、あまる、いる、かへる、きはめる、きる、くつがへる、こむ、こめる、しめる、たつ、たてる、ちぎる、ちらす、つける、つめる、とほる、ぬく、のぼる、はてる、はらふ、はる、まくる、合す、合ふ、重なる、かよふ、乱る、広がる、そろふ、まはす、めぐる、かかる、来る、あたる、至る、受ける、及ぶ、届く、加へる、添ふ（以下省略）

このように、「抽象的関係」の動詞が量的に他の意義範疇に比べて優勢であるところは、複合動詞後項の場合と似通っている。

次に条件の㈠としてあげた「他の語の下につくこと。」という条件を満足するものは、後置率一〇〇パーセントの後項動詞がまず挙げられる。武部氏の挙げられた一七五語の後置率を、源氏物語の場合に引き当ててみると、〈表7〉のとおりである。

この表に見られるように、後置率五〇パーセント以上の動詞が七〇パーセント強を占め、四九パーセント以下の動詞とは顕著な差が認められる。こうして、補助動詞が、主として後置率五〇パーセント以上の動詞で成立していることは明らかである。

そこで、補助動詞の三条件を、源氏物語の後項動詞に当てはめると、次のように具体的に提示することができる。

A後置率一〇〇パーセント（修正値）で、「抽象的関係」に属し、補助的に用いられる語　（　）は、後項としての異なり複合度数。その下は複合動詞の一例。以下同じ。

そむ（52扱ひそむ）、止す（18言ひさす）、あつむ（15言ひ集む）、換ふ（11書きかふ）、かぬ（10争ひかぬ）、込む〈四〉（8来こむ）、交ず（8言ひ交ず）、あまる（7思ひあまる）、遣す（7言ひおこす）、そす（6言ひそす）、増す（6思ひ増す）、止む〈四〉（6思ひやむ）、うごかす（4押し動かす）、交ふ（4散りかふ）、まがふ（4散りまがふ）、まはす（4言ひ回す）、めぐらす（4思ひめぐらす）、しろふ（3言ひしろふ）、ちがふ〈四〉（3飛びちがふ）、ひろぐ（3言ひひろぐ）、くつがへる（2されくつがへる）、さく〈下二〉（2追ひさく）、しぞく（2ゐざりしぞく）、すくむ〈四〉（2書きすくむ）、すぐる（2引きすぐる）、つむ〈集〉（聞きつむ）、ととのほる（2生ひととのほる）、とほす（2吹きとほす）、延ぶ（2見のぶ）、はふ〈下二〉（2振りはふ）

1例のものは省略する。四、下二は活用の種類。以下同じ。

B後置率一〇〇パーセント（修正値）で「抽象的関係」以外の意義範疇に属し、補助的に用いられる語

敢ふ（25言ひ敢ふ）、つかはす（5言ひつかはす）、はやす（4言ひはやす）、あやまつ（2しあやまつ）、果す（2書きおほす）、かずまふ（2思しかずまふ）、むつかる（2泣きむつかる）、をかす（2言ひをかす）

C後置率一〇〇パーセント（源語で）で「抽象的関係」に属し、補助的に用いられる語

はつ（96あきはつ）、つづく〈下二〉（17言ひつづく）、止む（10掛けとむ）、あつ〈下二〉（9射あつ）、ちらす（9言ひちらす）、つぐ（8追ひつぐ）、満つ〈四〉（8住みみつ）、あがる（7起きあがる）、消つ（7言ひけつ）、およぶ（6思ひおよぶ）、とどまる（6落ちとどまる）、みだる〈四〉（6言ひみだる）、つづく〈四〉（5追ひつづく）、くだる（4思ひくだる）、

のく(㊀)(4立ちのく)、触る(4言ひふる)、さまよふ(4立ちさまよふ)、まがふ(4飛びまがふ)、こす(3吹き越す)、しく(3降りしく)、すごす(3見すごす)、なほる(3ゐなほる)、はづす(3取りはづす)、をり(3思ひをり)　2例以下のものは省略。以下同じ。

D後置率一〇〇パーセント(源語で)で「抽象的関係」以外の意義範疇に属し、補助的に用いられる語

ありく(48言ひありく)、う(12書き得)、困ず(4思ひ困ず)、送る(3見送る)、くらぶ(3見くらぶ)、まよふ(3吹きまよふ)

以上、後項動詞のうちで、補助動詞に最も近いものを求めるために、後置率・意義範疇および付属性の三つを条件として立てゝみた。この試行に誤りが無いと仮定しよう。そうすると、後置率そのものは連続的であるゆえに、どこかに一線を画することは困難である。また、意義範疇にしても、従来補助動詞とされているもののすべてが「抽象的関係」に属するわけではないから、これも決定的条件とは成しがたい。とすれば、後項動詞は、補助動詞に最も近いものから遠いものまで、連続的に並んでいることになり、補助動詞と後項動詞とは、明確に区別しがたいものであることを認めることになるのである。

むすび

複合動詞後項の性格を、後置率および意義範疇という二つの角度から考えてきた。以上述べたところを簡単に並べて「むすび」としたい。

(一)後項には、後置率の高い語の来ることが多く、意義では「抽象的関係」、中でも「改新・変換・動き」等、「2.15」の範疇に属するものが最も多い。

(二)前項動詞と後項動詞との結合を、三つの意義範疇の組合せと考えると、前項「精神および行為」、後項「抽象的関係」という組合せが最も多い。とくに後項には「抽象的関係」に属する動詞の来ることが多い。

(三)補助動詞と後項動詞との関係について見ると、後項動詞は、補助動詞に最も近いものから遠いものまで、連続的に並んでおり、両者を明確に区別することは困難である。

(注)

1　山田孝雄『日本文法学概論』
　松下大三郎『改撰標準日本文法』
　斎賀秀夫「語構成の特質」(『構座現代国語学Ⅱ』所収)
　関一雄「中古中世のいわゆる複合動詞について—源氏・栄花・宇治拾遺・平家の四作品における—」(『国語学』三二輯)、「『いでたつ』と『たちいづ』」(『山口大学文学会志』一五—一)ほか。

2　林和比古「補助用言とその派生問題について」(『橋本博士還暦記念国語学論集』所収)
　武部良明「複合動詞における補助動詞的要素について」(『言語民俗学論叢』所収)

3　『計量国語学41』(昭和42・7・31)所収

4　「奉る」「給ふ」「侍り」等の敬語系補助動詞を除く。異なり度数を調べるに当り、次の操作を施した。①「うちあかむ」「う

ちあぐ」等の「うち」は、明らかに接頭辞と考えられるので除く。「かき」「さし」等は入れる。②「もてあがむ」などの「もて」は語性が明らかでないので除く。③「ゐんぜられはつ」「のたまはせつく」のごとく、助動詞の介入したものは除く。④「くす（屈）」「くんず」、「うず（倦）」「うんず」は表記上のゆれと見て同語とする。⑤「すごす」「すぐす」、「かなしむ」「かなしぶ」、「いく」「ゆく」、「まつはす」「まとはす」、「つかうまつる」「つかまつる」などは別語としない。⑥「いでたちまゐる」などの三語およびそれ以上の複合については、別に調査した結果、2＋1、2＋2等にその構成を分割し得ることがわかった。従って、たとえば右の例では、「いでたつ」と同様に扱う。なお、複合の基本が二語複合であることは、既に山田孝雄博士が述べておられる。注1参照。

5　宮島達夫『古典対照語い表』をはじめ、次の公刊の索引を用いた。『落窪物語総索引』『大和物語語彙引』『更級日記総索引』『平中物語本文と索引』『篁物語総索引』『浜松中納言物語総索引』『夜の寝覚総索引』『梁塵秘抄総索引』『古本説話集総索引』『今昔物語集文節索引巻二、三、五、七、十一、十二、十三、十七、二十二、二十三、二十四、二十五、二十七、二十九、三十、三十一』『平家物語総索引』

6　たとえば「かかやく」は、光を表す一方で羞恥を表すが、このような多義性の語は複数の意義範疇に入れた。この処理に該当したのは次の諸語である。つつむ、あらはす、なほす、止（と）む、とく〈四〉、まがふ〈四〉、やぶる〈四〉、わづらふ、かかやく、あかす、いそぐ、いだす、いづ、起す、みだる、〈四〉具す、すぐ、よす、まさる、立つ〈四〉、居る、わたる、わかる〈下二〉、たづぬ、をさむ、にほふ（〈四〉は四段、〈下二〉は下二段を表す。）

多義性は、一語の用法上の分化と見るべきものと考える。それゆえに、後置率の算出に当っては、意義分化を考慮していない。この種の後置率は別表では（　）に入れた。

7　意義分化の結果、意義範疇が、たとえば「2.1」と「2.3」あるいは「2.5」にわたるものがある。それらの語は、範疇別に後置率を算出することができないので、この表からは除いてある。注6に掲げた前半の十一語（つつむ……いそぐ）がそれである。意義分化が同一意義範疇にとどまる場合は、この限りでない。注6に掲げた後半の十五語（いだす……にほふ）がそれである。

8　〈表4〉〈表5〉の数値は、後置率に関係無く別表から拾った総数である。そのため、〈表1〉の合計数には合致しない。

9　『日本文法大辞典』「補助動詞」の項。吉田金彦氏執筆

10　「動詞の問題点」（『品詞別日本文法講座3』所収）

11　注2参照。

（付記）

小考は、その大要を昭和五〇年度広島大学国語国文学会春季研究集会において発表した。

（高知大学助教授）

〈表1〉

	後置率	100	~90	~80	~70	~60	小計	~50	~40	~30	~20	~10	10以下	小計	計
意義範疇	2.111 ~2.19	122 (61)	17	25	17	22	203 (142)	27	7	13	10	4	2	36	266 (205)
	(%)	23.1	3.2	4.7	3.2	4.2	38.5	5.1	1.3	2.5	1.9	0.76	0.38	6.8	50.47
	2.300 ~2.386	66 (31)	5	8	16	22	117 (82)	30	11	18	19	23	7	78	225 (190)
	(%)	12.5	0.94	1.52	3.03	4.2	22.2	6.7	2.1	3.4	3.6	4.4	1.33	14.8	42.69
	2.501 ~2.585	15 (9)	0	3	1	4	23 (17)	3	1	2	5	2	0	10	36 (30)
	(%)	2.84	0	0.57	0.19	0.76	4.4	0.44	0.19	0.38	0.95	0.38	0	1.9	6.83
計		203 (101)	22	36	34	48	343 (241)	60	19	33	34	29	9	124	527 (425)
	(%)	38.5	4.2	6.8	6.5	9.1	65.1	11.4	3.6	6.3	6.5	5.5	1.7	23.5	100.1

（ ）は索引類による修正値。第一節参照。

〈表2〉

[2.1]	100~60	49~10以下	計
実測値	203 (142)	36	239 (178)
理論値	119.5 (89)	119.5 (89)	239 (178)

[2.3]	100~60	49~10以下	計
実測値	117 (82)	78	195 (160)
理論値	97.5 (80)	97.5 (80)	195 (160)

[2.5]	100~60	49~10以下	計
実測値	23 (17)	10	33 (27)
理論値	16.5 (13.5)	16.5 (13.5)	33 (27)

[2.1] $\chi^2 = 116.69$ (63.12)
[2.3] $\chi^2 = 7.80$ (0.10)
[2.5] $\chi^2 = 5.12$ (1.81)
いずれも 自由度 1　$\chi^2_{0.05} = 3.841$
表中の( )は修正値

〈表3〉

		100	~90	~80	~70	~60	計
2.1	実測値	122	17	25	17	22	203
	理論値	119.77	14.21	20.3	20.3	28.42	203
2.3	実測値	66	5	8	16	22	117
	理論値	69.03	8.19	11.7	11.7	16.38	117
	計	188	22	33	33	44	320

$\chi^2 = 9.68$ 自由度 4
($\chi^2_{0.05} = 9.488$ 自由度 4)

〈表4〉

		例数
意義範疇	2.11	14
	2.12	26
	2.13	12
	2.15	201
	2.16	10
	2.17	8
	2.18	1
	2.19	5
計		277

〈表5〉

		例数
意義範疇	2.30	116
	2.31	16
	2.33	30
	2.34	13
	2.35	17
	2.36	21
	2.37	12
	2.38	14
計		239

〈表6〉

意義範疇		前項 2.1	前項 2.3	前項 2.5	計
後項	[2.1] 実測値	567	842	45	1454
	[2.1] 理論値	465.28	945.10	43.62	
	[2.3] 実測値	172	641	5	818
	[2.3] 理論値	261.76	531.70	24.54	
	[2.5] 実測値	9	31	8	48
	[2.5] 理論値	15.36	31.20	1.44	
計		748	1514	58	2320

自由度 4　$\chi^2 = 134.8$　($\chi^2_{0.05} = 9.488$ 自由度 4)
後項[2.1]　$\frac{1454}{2320} \cdot 100 \fallingdotseq 62.7$ (%)

〈表7〉

源氏物語の後項動詞に無い語	後置率 49以下	後置率 50以上	後置率 100	
40	11	71	53	語数
		124		
22.9	6.3	70.9		%
100.1				

<別表>「種」とは、「後項としての異なり複合度数」のことである。

意義範疇	語	種	後置率
2.111	かかづらふ	3	37.5
2.112	ちがふ<下二>	1	100
	○似す	1	100
	○ひがむ<下二>	3	100
	たがふ<下二>	3	75.0
2.113	○まず	8	100
	負ふ	2	100
	くくむ	2	100
	いただく	1	100
	おほふ	1	100
	○くむ(含)	1	100
	まじる	9	90.0
	まと(つ)はす	7	69.2
	まつはる	3	60.0
	つつむ	(3)	(33.3)
2.120	をり	3	100
	いますす	1	100
	○ます	1	100
	居る	61	83.6
	おはします	26	78.8
	おはす	35	74.5
	あり	1	16.7
2.121	きざす	1	100
	あらはす	(8)	(88.9)
	いだす	(22)	(84.6)
	出づ	(109)	(86.5)
	かくす	16	66.7
	かくる	8	57.1
	かくろふ	1	20.0
2.122	起こす	(4)	(66.7)
	成る	10	40.0
2.124	消つ	8	100
	つくす	12	92.3
	うしなふ	3	75.0
	失す	5	71.4
	残す	5	71.4
	残る	4	57.1
	絶ゆ	5	50.0

	消ゆ	2	18.2
2.125	のく<下二>	1	100
	捨つ	19	79.2
	払ふ	3	42.9
2.130	○ととのほる	2	100
	○みだる<四>	(6)	(100)
	具す	(2)	(100)
	ととのふ<下二>	7	63.6
	みだる<下二>	11	45.8
	ととのふ<四>	1	33.3
2.131	○かぬ	10	100
2.132	はづす	3	100
	かなぐる	2	100
2.134	張る	2	50.0
	のどむ<下二>	2	66.7
2.135	さはる	1	100
2.1500	かはる	8	88.9
	うつろふ	2	25.0
2.1501	○換ふ	11	100
	なほる	4	100
	かはす	26	96.3
	なほす	14	93.3
	あらたむ	3	33.3
2.1502	果つ	97	100
	○そむ(初)	54	100
	○やむ<四>	7	100
	○さす(止)	18	100
	とぢむ	2	100
	○やむ<下二>	1	100
	始む	23	95.8
2.1503	つづく<下二>	18	100
	つぐ	8	100
	つづく<四>	5	100
2.1510	○うごかす	4	100
2.1511	○まはす	5	100
	○めぐらす<四>	5	100
	たゆたふ	2	100
	ゆるがす	1	100
	ゆする(揺)	2	66.7
2.1512	とむ(止)	(11)	(100)
	とどまる	6	100
	とどむ	20	90.9

	とまる	8	88.9
2.1513	ふす<下二>	1	100
	なびかす<四>	2	100
	居る	(61)	(83.6)
	ふす<四>	18	78.3
	立つ<下二>	31	77.5
	起こす	(4)	(66.7)
	なびく	1	50.0
	立つ<四>	(20)	(30.8)
	起く	2	20.0
2.1514	○くつがへる	2	100
	たふる	1	25.0
	まろぶ	1	20.0
2.1515	敷く	3	100
	さぐ(下)	2	100
	置く	73	96.1
	かかる<四>	20	95.2
	据う	14	93.3
	掛く	17	68.0
	垂る	2	66.7
	構ふ<下二>	3	60.0
2.1516	うづむ<四>	1	100
	うづもる	2	100
	はさむ	1	100
	○浸す	1	100
2.1521	○おこす<下二>	7	100
	およぶ	6	100
	のく<四>	4	100
	越す	3	100
	やる(遣)	43	97.7
	わたす	22	95.7
	わたる	57	85.1
	いたる	2	66.7
	越ゆ	2	50.0
	移る	5	45.5
	移す	4	44.4
	立つ<四>	(20)	(30.8)
	たどる	2	28.6
2.1523	○すぶ(滑)	1	100
	さまよふ	4	100
	○めぐらふ	1	100
	すべす	4	80.0
	流す	5	71.4

	ただよふ	2	50.0
	めぐる	3	42.9
2.1524	○とほす	2	100
	とほる	3	75.0
2.1525	○さきだつ	1	100
	わたる	(57)	(85.1)
	かよふ	18	81.8
	過ぐ	(19)	(79.2)
	のがる	3	75.0
	逃ぐ	1	25.0
2.1526	しりぞく	1	100
	○しぞく	2	100
	進む	1	16.7
2.1527	○往ぬ	1	100
	かへす	17	85.0
	来	46	83.6
	去る	5	71.4
	行く	51	69.9
	かへさふ	4	66.7
	かへる	21	58.9
	おもむく<下二>	1	50.0
	まゐる	14	37.8
	まかる	1	4.2
2.1530	入る<下二>	26	89.7
	出づ	(109)	(86.5)
	いだす	(22)	(84.6)
	入る<四>	36	80.0
	まかづ	3	60.0
2.1531	○こむ<四>	8	100
	○詰む	2	100
	こむ<下二>	14	93.3
	抜く	1	33.3
2.1532	○ひそむ	2	100
	もらす	4	80.0
	こもる	5	50.0
2.1540	あがる	8	100
	くだる	4	100
	あぐ	10	83.3
	くだす	3	75.0
	のぼる	12	70.6
	おとす	8	61.5
	こぼる	3	42.9

	落つ	6	31.6
2.1541	載す	1	100
	しづむ<四>	6	66.7
	しづむ<下二>	6	66.7
	おろす	10	66.7
	おる(下)	3	50.0
2.1550	○しろふ	3	100
	あはす<下二>	23	92.0
	解く	3	60.0
2.1551	○みだる<四>	6	100
	○まがふ<四>	4	100
	あふ<四>	68	82.9
2.1552	散らす	9	100
	へだつ<下二>	6	60.0
	散る	11	57.9
	わく<下二>	8	50.0
2.1553	ひらく<四>	1	100
	とづ	1	25.0
2.1554	積む	2	100
	○むすぼほる	2	100
	しきる(頻)	1	100
	重ぬ	7	87.5
	つもる	1	50.0
	結ぶ	3	33.3
	ゆふ	1	20.0
2.1555	○あつむ	16	100
	○つむ(集)	2	100
	あつまる	4	80.0
	つどふ	4	57.1
2.1556	つる(連)	2	100
	ゐる(率)	1	100
	具す	(2)	(100)
2.1560	触る	4	100
	○そばむ<下二>	1	100
	付く<下二>	26	92.9
	寄す	(17)	(89.5)
	付く<四>	25	83.3
	寄る	42	82.4
	そばむ<四>	1	50.0
	ちかづく<四>	1	33.3

紙幅の都合により、以下省略する。